

葉緑素計 (SPAD-502) を用いた 被覆栽培における一番茶の摘採時期の判別法

近年、緑茶の荒茶市場での評価基準が従来の「形状」、「香り」、「滋味」から「色沢」、「水色」、「葉中全窒素量」へと変化しています。

茶の生産現場では被覆資材を利用して5～14日間ほど遮光を行い、色沢および水色を向上させる技術が定着していますが、被覆処理を施しても市場評価が低い荒茶も多くみられます。そこで、熊本県農業研究センター茶業研究所では、摘採前に被覆処理の効果が確認できるように、葉緑素計 (SPAD-502) を活用し、色沢や水色の評価が高くなる摘採時期の判別法を開発しましたので、その概要を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 新芽の上位から3葉目の葉の中央下部左右で SPAD 値を測定し平均すると、50 を超える時期から被覆処理の効果が十分得られ、官能審査での色沢および水色が良好で評価が高くなります (図1、図2)。
2. 新芽の出開き度が進むと、SPAD 値は上昇しますが葉中全窒素量は減少します。
3. この摘採時期の判別方法は、「やぶきた」の他、「さえみどり」、「さきみどり」、「おくみどり」にも適用できます。

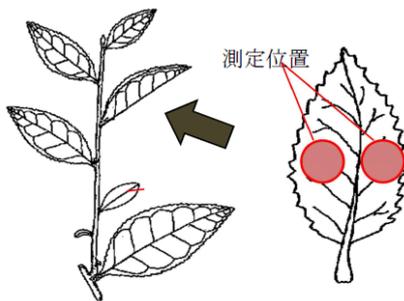


図1 測定する茶葉と測定位置

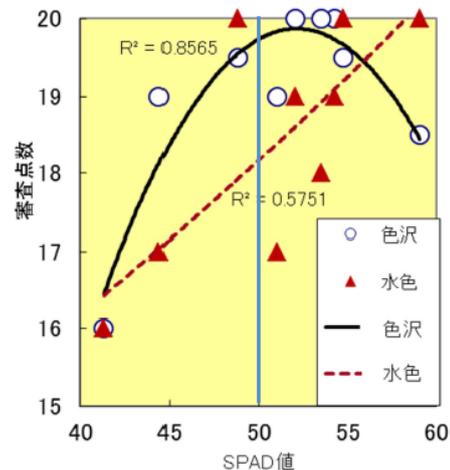


図2 SPAD 値と官能審査点数
(2013年やぶきた)

☆ 活用面での留意点

1. SPAD 値は10本程度の新芽を選択して測定し、平均値を算出します。
2. この成果は、「やぶきた」を遮光率70%の被覆資材 (バロンスクリーン) を用いて2～3葉期に被覆処理を開始し、5～10日間被覆したデータを中心に解析したものです。
3. 低温や曇天が続く気象条件により、上位3葉目が黄色みを帯びたままで、色染まりが悪い場合は、出開き度により判断し摘採します。
4. 詳しいことは、熊本県農業研究センター茶業研究所 (TEL:096-282-6851) にお問い合わせ下さい。 (日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏)